

『パウロに与えられた務め③』

'22/06/12

聖書箇所:エペソ人への手紙 3章 10-13節(新約 p.376)

皆さんは、「十二人の怒れる男」という映画をご存知でしょうか?…これは1957年(昭和30年代)に、アメリカで公開された、陪審員制度を取り上げた映画なのですが、私はその映画を観たのは、まだ、中学生の頃でした。簡単に、その映画の概要を説明いたしますと…、ある事件が起こりまして、12人居た陪審員の内、当初は11人が容疑者を有罪と考えます。しかし、たった1人…、名優ヘンリー・フォンダが演じる陪審員だけが、「証拠が不十分だ」ということで無罪を主張します。

そうして、その映画の大半が、陪審員たちが話し合う会議室の中で進行していくのですが、その中で、陪審員たちが裁判で提出された証拠や証言を精査していきながら、本当に、それらの証拠が妥当なものなのか?信頼に値するものなのか?ということを検討していき、とうとう最後には、全員一致で、証拠不十分だ!ということ、容疑者の無罪が確定する、といった内容でありました…。

それを観た当時中学生だった私は、「圧倒的多数の意見が必ずしも真実とは限らない!」ということ、
「しっかりと目をもって、真実を探求していかななくてはならない!」ということ、強く学ばせられた映画であったと、今でも強く印象に残っています。

命題: 神がパウロに与えてくださった務めとは?

そういうことについては、また後ほど触れさせていただきますが…、今日は、先々週と先週に続いて、神様がパウロに与えてくださった務めというものをみていくことによって、偉大なる神様の恵みというものを、再確認していきたいと思えます。今日は、その3回目になりますが、どうぞ、聖書をお持ちでしたら、エペソ 3:1-13をお開きください。

I・パウロに務めを与えられた、神様の「ご計画」!(1-6節)

まずは前々回に学んだ、みことばの復習をさせていただきます。神様はパウロという人物を選んで、御自身の「御計画」に用いようとしてくださいました。天の神様は、パウロに対してだけ、御計画を持っておられたのではなく、私や皆さんに対しても、最善なる御計画を持っておられるのです。エペソ 3:1-6には、こうあります。

- 1 こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった私パウロが言います。
- 2 あなたがたのためにと私がいただいた、神の恵みによる私の務めについて、あなたがたはすでに聞いたことでしょう。
- 3 先に簡単に書いたとおり、この奥義は、啓示によって私に知らされたのです。
- 4 それを読めば、私がキリストの奥義をどう理解しているかがよくわかるはずですよ。
- 5 この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。
- 6 その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。

神様による救いのメッセージ…、福音を宣べ伝えた結果として、この手紙を書いていた時のパウロは、ローマで軟禁状態にありました。つまり、投獄されていたのです。しかし、「真の神様は全知全能であられ、すべてのことを最善なるみこころのままに導いてくださっている!」ということを強く信じていたパウロは、投獄されても、一切、落ち込むということがありませんでした。

今読んだみことばには、「奥義」という言葉が何度も繰り返し使われていました。その奥義とは、神様

が、最善なる御計画を持っておられ、それを必要な時…、つまり、これまた、最善の時に、それを実行して下さる! 明らかにしてください!ということが分かります。…神様は、はるか昔、あのアブラハムに教えてくださった通り(創世記 12:3)、「アブラハムの子孫であるユダヤ人たちだけでなく、地上のすべての民族を、アブラハムと同様の信仰によって祝福しよう!」と決めておられたのです。

だから、パウロは投獄中であっても、「自分に与えられていた務め」というものを忘れることなく、自分に与えられたその務めを全うしていくことができたのです!…現代、一体どれほどのクリスチャンが、このパウロと全く同じ神様を信じ、また、同じような聖書理解を持っていながら、ちょっとした…、些細なことでも落ち込み、また、神様にグチや不平不満をこぼしてしまっているのでしょうか?…願わくは、私たちも、このパウロと同様、どんな状況であっても、「常に、神様は私たちと共に居て、最善のことをなしてくださっている!」という確信のもと歩んでいきたいものです…。

II・パウロに与えられた務めの「内容」!(7-9節)

それと、先週私たちが学んだみことばは、7-9節のみことばでした。そこには、神様がパウロに与えられた務め(=任務)の内容について記されておりました。どうぞ、7-9節をご覧ください。

- 7 私は、神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって、この福音に仕える者とされました。
- 8 すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に、この恵みが与えられたのは、私がキリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝え、
- 9 また、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現が何であるかを、明らかにするためです。

このみことばは、そのパウロに与えられた務めの詳細について記されています。パウロは、『福音に仕える者』とされて、その福音のメッセージを、主に異邦人たちに宣べ伝えました。それと、神様は、パウロたちを通して、『奥義の実現』ということを達成してくださいました。その結果、かつては、ユダヤ人たちが受けることができなかったはずの恵みが、今では、イエス様を信じる信仰によって、いかなる人種や性別の区別無く、すべての者たちが同じ恵み、同じ祝福に預かることができているのです。

このように、神様は、この奥義を、今では全世界に行き渡らせてくださいました。実に、そういうことのために、パウロやイエス様の12使徒たちは用いられたのです!

このように、神様のみことばは真実です! 神が「そうなる!」とおっしゃられたことは、必ずそう成ります! ちょうど、あの創世記1章で、神様が、「光があれ! 大空があれ!」とおっしゃられたことが、そのお言葉通りになったように…。だから! 私たちは今、聖書のみことばを学ぶわけですよ。…と言いますのは、(聖書を持ち上げて、)ここに、神様のお言葉が…、神様の約束が記されてあるからです! すべてのことは、神様のお言葉通りに…、神様の語ってくださった預言やみこころの通りになっていくから…。

また、パウロは、自分自身のことを、「価値のある…、才能に満ち溢れた人間だ。だから、私は、神様から託された任務を全うできるのだ…」とは言いませんでした。むしろ、パウロは自分自身のことを、『すべての聖徒たちのうちで一番小さな私』とか、『罪人のかしら…、使徒と呼ばれる価値のない者』という認識を持っておりました。…でも! そんなパウロだったから、彼は自分自身の力に過信することなく、その神様の全能なる力によって、あの難しい時代にあって、大変な迫害の中でも、福音宣教をなしていくことができたのです。…そういうことが、ここ2週で、私たちが学んだ内容であります。

Ⅲ・パウロが務めを果たした結果！(10-13 節)

さて今日は、そのパウロが神様から与えられた務めを果たした時に、与えられた結果について見ていきましょう。天の神様は、神様から託された務めを全うしようとしたパウロに、どのような報いを与えられたでしょうか？どうぞ、10-13 節をご覧ください。

- 10 これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、
- 11 私たちの主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた神の永遠のご計画によることです。
- 12 私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって大胆に確信をもって神に近づくことができるのです。
- 13 ですから、私があなたがたのために受けている苦難のゆえに落胆することのないようお願いいたします。私の受けている苦しみは、そのまま、あなたがたの光栄なのです。

① 神の栄光が 天使たちにも現わされる！(10-11 節)

今お読みしました、10 節の、『天にある支配と権威』というのは、まず間違いなく、天使たちのことです。…と言いますのは、以前、エペソ 1:21 を学んだ時にもお話したように、実は、ここで言われている、『支配と権威』といったようなものは、この当時、御使い(=天使)や、御使いが影響を及ぼしているものと考えられていたからです…。だから、このエペソ書でも…、例えば、エペソ 2:2 には、『そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の“権威”を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従つて、歩んでいました。』とあつて、サタンのことが、『空中の“権威”を持つ支配者』として描かれています。また、エペソ 6:12 でも、『私たちの格闘は血肉に対するものではなく、“主権”、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。』とあつて、『血肉』、つまり、人間ではない悪霊たちを指して、『“主権”、力、暗やみの世界の支配者たち』などと表現されているからです。

ですから、ここで言われていることは、「教会というものを通して、神の豊かな知恵…、つまり、神様の偉大さや素晴らしさが、“御使いたちに対して”示されるためである」ということなのです。…皆さん、ちょっと、ここで、天使に関する情報を整理させてください。当然、天使たちは、私たち人間と同様、神様によって造られた被造物です。しかし、天使たちは私たち人間とは違って、肉体を持っていません。言わば、霊的な存在なのです。それゆえに、天使たちは年を取ることないし、不老不死です。もちろん、天使たちは神様とは違い全知全能ではありませんが、しかし、彼らは皆、神様によって造られてから、ずっと生きてるので、私たち人間とは比較にならないほど、たくさんの知識を持っているはずですよ。

でも、じゃあ、どうして神様の素晴らしさが御使いたちに…、つまり、天使たちに示される必要があるのか？⇒それはまず、天使たちも神様の被造物であるから…、彼ら天使たちにも「神様をほめたたえる」という使命が与えられているからです。…と言いましても、実は、天使たちには、神様の与えてくださる最高の恵みである、救いの素晴らしさが分からないのです。だって、天使たちには、救いが用意されていないでしょ？彼ら天使たちは誰も、罪を赦された者たちは居ないのです…。

ちょっと、皆さん。ヘブル 2:14-16 をご覧ください。『14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。16 主は御使いたちを助けるのではなく、確かに、アブラハムの子孫を助けて下さるのです。』⇒このみことばが教えてくれているように、かつて、私たちは『死の恐怖』に繋がれていました！しかし、そんな所から、

私たちを解放するため、イエス様は『血と肉とを持って…』、つまり、私たち人間と同じようになって、この地上に来てくださったのです。

それと、今度は、1 ペテロ 1:12 もご覧ください。『彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです。』⇒ここでは、かつて…、預言者たちによって語られていた教えが、聖霊なる神様によって明らかにされ、異邦人たちにまで伝わったことが教えられています。そういったことは、『御使いたちもはっきり見たいと願っていること…』であつた！と言うのです…。

それと皆さん、2週間前にも引用した、ルカ 15:10 を覚えてくださっています？そこでは、こう教えられておりました。『あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。』⇒このように、天使たちは救いについて知りたいのです！天使たちには救いが無いが故に…、救いの恵みや救いの感動…、また、その救いによってもたらされる大きな変化というものについて、天使たちは関心があるのです！そういったことを知ることによって、天使たちも私たちと同様、益々、神様をあがめ、神様をほめたたえていくことができます。…もちろん、こういったことは、神様はるか以前から計画されていたことでした。それを、イエス様が実現してくださったのです。だから、今日のみことばの 11 節に、『私たちの主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた神の永遠のご計画によることです。』とあるのです。

② 救われた者が、神にならった歩みをするようになっていく！(12 節)

どうぞ、今度は 12 節 をご覧くださいますと、『私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって大胆に確信をもって神に近づくことができる…』とありますが、こういったことは、エペソ 2:18 でも同じようなことが教えられていました。要は、私たちは大胆に聖い神様に近づくことができる！ということです。しかし、問題は、ここで語られている条件の方でしょう…。『私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって…』とありました。「…によって」という言い方は、「方法・手段について」教えてくれています。そこには、『キリストを信じる信仰』が必要なのは言うまでもありません。…それと、もう1つ、パウロは別の言い方をしています、『私たちはこのキリストに“あり”…』と。「一緒に居る、繋がっている」という意味です。

聖書のみことばは、明らかに、イエス様を信じて救われた者はキリストとつぎ合わされている、と教えます。例えば、あのヨハネ 15 章、「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」という教えがそうです。その他には、ローマ 6:4-6、『4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。5 もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。』⇒このみことばが教えてくれているように、イエス様を信じて救われた私たちは、あのイエス様と継ぎ合わされて、一体とされました。それを可能してくれたのが、今日のみことばには記されてありませんが「聖霊のバプテスマ」です。

イエス様を信じて、本当に救われた者たちは、この地上にあつて…、キリストが歩まれたように歩んでいきます。キリストが憎まれたものを憎む…、キリストが愛されたものを愛し、キリストが避けられたことを、私たちが避けようとしていくのです…。

ここではっきりと言っておきます！もし、皆さんの歩みが、イエス様を信じて救われる前と後で…、何も変わっていない！キリストに何ら近づいていないのなら、私たちは、もう一度、自分の救いを…、その信仰を

吟味する必要があります！何故なら、天の神様は、私たちのことを、『新しい歩みをするため』に救ったと、みことばは教えるからです！私たちの、『罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなる…』と、はっきり、みことばは約束してくれているでしょ！救われた皆さんは、もはや、『罪の奴隷』ではありません。だから、罪に対して勝利できるのです。…そういったことは、エペソ 2:8-10 でも教えられてあつたでしょ？『8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。9 行いによるものではありません。だれも誇ることもないためです。10 私たちは神の作品であつて、良い行いをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。』

ですから、本当に救われたクリスチャンは…、キリストとつぎ合わされた、私や皆さんは、罪を犯してしまう時に、神様からの責めを感じるのです。何故なら、神が罪を喜ばれないからです！イエス様を信じた私たちには、聖霊なる神様が内住（＝内に住んでくださっている）してくださっている証拠です！だから、つきっきり引用したみことばのすぐ前には、こんな議論がなされているのです。ローマ 6:1-2、『1 それでは、どういふことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。2 絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。』⇒みことばは何と教えてくれています？私たちが罪深ければ罪深いほど、その罪を赦してくださる神様の恵みも大きくなるわけだから…、「恵みが増し加わるために、私たちは構わずに罪を犯していきましょう！」と教えられていましたか？⇒いいえ！『絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。』とあつたでしょ？…確かに、イエス様を信じて救われた者は、その人が犯す過去・現在・未来のすべての罪が赦されます！しかし、本当に、イエス様を信じて救われた者は、だからと言って、「罪を犯しても構わないんだ！よし、積極的に罪を犯してやろう！」とは、決して言わないのです！何故なら、その人はもう既に、神様によってキリストに似た者へと変えられつつあるからです（Ⅱコリント 3:18）。

③ 迫害を通して、神の栄光は現わされていく！（13 節）

最後、13 節を見ていきましょう。『ですから、私があなたがたのために受けている苦難のゆえに落胆することのないようお願いします。私の受けている苦しみは、そのまま、あなたがたの栄光なのです。』

皆さんは、遠藤周作の「沈黙」という作品をお読みになったことがあるでしょうか？…これは、その昔、キリスト教が、この日本において、「切支丹」と呼ばれ、壮絶な迫害を受けていた頃を背景として描かれた物語なのですが、…神を信じ、神に忠実に生きている者たちが迫害され、殺されていく時に、天の神様はそれをあたかも見放しておられるかのように放置し…、沈黙しておられる…、果たして神は本当に存在するだろうか？というようなテーマになっています。

このような考え方は、いつも私たちの周りにあります…。例えば、イエス様が十字架に磔になった時、そこでは、イエス様にこんなことを言う者たちがいました…。『42 「彼は他人を救ったが、自分は救えない。イスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおうか。そうしたら、われわれは信じるから。43 彼は神により頼んでいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただかないか。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。』』（マタイ 27:42-43）⇒このような考え方…、つまり、短絡的な結果における成功、不成功が、そのものの、正、不正（＝正しいか、正しくないか）を決定してしまうのです。特に、この日本においては、ご利益宗教の傾向と言うか…、「この神様を信じたら、じゃあ、どんなものが与えられるのか？」というようなことで、神様の是非（＝良い・悪い、居る・居ない）を判断してしまう傾向が強いのだと思います。かつて、戦時中に、キリスト教会が政府によって弾圧され、牧師が投獄された時、そのことだけでキリスト教を間違つた恐るべき宗教であると決め付けた、そのような感覚が、今でも私たちの周りに残っているのではないのでしょうか？

しかし、もし今、あの十字架上のイエス様をあざけた者たちが、この世界中でイエス・キリストがあがめられて…、キリスト教会が点在している様を見たら、何と言うでしょうか？…確かに、彼らからすると、イエス様が十字架で息を引き取られた瞬間は、イエス様が敗北したように見えたくも知れません。しかし、そのわずか3日後、約束通り、イエス様はよみがえられて、私たちの罪の贖いをなしてくださり、私たちに救いの道を用意してくださつたのです！もし、イエス様があの瞬間…、十字架から降りてこられていたら、私たちに救いの道はありませんでした…。決して、イエス様は敗北されたものではありません！イエス様は、死に対しても、罪に対しても…、また、当時、イエス様をあざけた者たちにも勝利されたのです！そうでしょ！

ここ 13 節で、パウロは言います、「私が投獄されているからと言って、気落ちしないでください。」って…。何故なら…、パウロの受けている『苦難』は、神様のみこころであり、こういふことを通して…、益々、『キリストの奥義』、つまり、異邦人たちも、等しく神の恵みにあずかることができ、もはや、人種の区別などは意味がなくなつて…、益々、福音が世界中に広まっていくということが当たり前になっていくからです！「パウロの投獄」は、そのために必要なステップだつたのです！…だから、ここ 13 節は、『ですから…』という言葉で始まっているのです。普通なら落胆してしまうような…、そんな状況の中でもパウロは、一切、神様を呪ったり、愚痴をこぼしたり、悲観したりはしませんでした。その理由は、あのパウロが目先の問題だけを見ていたのではなく…、その背後におられる神様と神様の御計画というものに目を留めていたからなのです。

ここ 13 節の後半は、少し理解しにくい文章かも知れません。『…私の受けている苦しみは、そのまま、あなたがたの栄光なのです。』⇒これはどういふことを言わんとしているのでしょうか？この前の文章で、パウロは、自分の受けている苦難のことを、「私の苦難…」とは言っていません。『あなたがたの“ために”受けている苦難…』と言っていますよね？つまり、異邦人たちのための苦難という意味です。何故なら、パウロが当時、受けていた苦しみは、まさに、パウロが異邦人に福音を語っていたが為のものであつたからです。

つまり、パウロの経験していた苦難は、パウロの異邦人たちに対する愛の証しでもあり…、何より、そういふことによつても、神様の愛が現わされているからなのです！パウロだけでなく、異邦人たちの救いのために、多くのクリスチャンたちがその身を投じていくことによつて、異邦人の救いの必要性…、異邦人のことも神様は約束の民たちと同様に愛しておられる！ということを示しているのです。

もし、パウロたちの語る福音が間違つていたのなら…、もし、異邦人がユダヤ人と等しく救われることが無いのなら…、パウロたちの受ける苦難によつて、異邦人への福音宣教は途中で止まらなくなってしまつたに違いありません…。しかし、実際はどうだつたでしょう？まさしく、この頃から、異邦人の時…、教会の時代が始まつたのです！もはや、神様の救いは、ユダヤ人だけのものでも…、イスラエル中心のものでもありません！人種や民族、国籍など、一切関係なしに…、神様を信じるすべての人に等しく与えられるのです！それこそが、パウロがここ3章で訴えている、『キリストの奥義』なのです！

<励ましの言葉>

Ⅰコリント 1:22 のみことばは、こう教えてくれています、『ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。』って…。このように、弱く愚かな私たち人間は、目に見えるしるしを…、ある種の証拠というものをも求める傾向にあります。しかし、マルコ 8 章には、こんなエピソードが載っています。…ある時、イエス様のもとに、パリサイ人たちがやつて来て、イエス様を試そうとして、『天からのしるし』を求めた、なんてことがありました。その時、イエス様は、彼らに対して、こう宣告されたのです。『…なぜ、今の時代はしるしを求めぬのか。まことに、あなたがたに告げます。今の時代には、しるしは絶対に与えられません。』（マルコ 8:12）って…。

今日のメッセージの冒頭でも話しましたように、多数決が、必ずしも真理を証明するものではありません。むしろ、イエス様は、『13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いいです。 14 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。』(マタイ 7:13-14)と教えてくださったじゃないですか。

いつの時代であっても、本当の信仰が大多数になることは無いと、みことばは教えます。だから、みことばは約束するのです！『確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。』(Ⅱテモテ 3:12)って…。

良いでしょうか、皆さん。間違いなく、私たちが神様の教えを語っていこうとすると、苦難は降りかかってくるし、間違いなく、迫害は襲ってきます。しかし、今日までの3回の学びを通して、皆さんは分かってくださったはずですよ！神様の与えてくださる救いの素晴らしさ、また、神様の恵みについて…。

パウロを始め、多くのクリスチャンたちは、人が救われるために、命さえも惜しまないで福音を語り続けました。何故なら…、福音には、それだけの価値があるからです！

もしも、皆さんが、この福音だけが…、イエス・キリストだけが私たちが永遠の罪の裁きからも、死の恐れからも…、私たちが救ってくれる神からの贈り物だと信じておられるのなら、私たちは間違いなく、この福音を…、イエス・キリストを証していくはずですよ！どうぞ、この1週間も…、また、私たちが天に召されるその瞬間まで、この神様のことを伝えていってください。そういったことを、天の神様も、また、イエス様も、私や皆さんに願っておられるのですから…。

そうして、まだ、イエス様を信じておられない皆さん。パウロたちが宣べ伝えていった、この福音のメッセージ…、救いのメッセージは、すべての人々を救うことができる唯一のメッセージです。また、この福音は、死の恐怖から私たちが救い出し、様々な病や老いという問題からも…、また、自分がこの世に生まれてきた意味や「生きがい」なんていう問題にも解決を与えてくれます。このメッセージ以外に、私たちの罪が赦されて、造り主なる神様と和解できて、本当に価値ある人生を送って、その神様からの祝福を受ける方法はありません！どうか、1日も早く、救い主として、あの十字架にかかり、約束通り、その死からよみがえってくださったイエス・キリストを真の神様と信じて、あなたの人生のご主人様として受け入れてください。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。